



〈研究〉大西猪之介教授個性業績の回顧

高島，佐一郎

(Citation)

経済学商业学国民经济杂志, 32(4):586-611

(Issue Date)

1922-04

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00053423>



大西猪之介教授個性業績の回顧

Ein Mensch sein heisst ein Kämpfer sein. -Goethe-

Wer immer strebend sich bemüht, den können wir erlösen. -Goethe-

Sguaiato Giosué Fermare il sole.

Segui il tuo corso, e lascia dir le genti. -Dante-

名古屋・小樽高等商業學校教授

商 學 士 高 島 佐 一 郎

- 一、謂ゆる「日本經濟學界の鬼才」――強き個性。
- 二、個性發展の階段としての闘争――努力――調和。
- 三、「帝國主義論」及び後の研究方法論的傾向を暗示せる外遊前の論說。
- 四、西南歐諸學府に於ける消息。
- 五、憧憬が個性を育くめる表徴としての「伊太利亞の旅」。
- 六、經濟學方法論乃至認識論上の一貢獻としての「囚はれたる經濟學」。
- 七、遺稿本及び雜述作一束。

あくまで淨き雪の北海萬象を聖化し宗教的敬虔感激のおのづから人心の深かみに高潮し來る冬の一
夜、大正十一年二月八日、わが經濟學界若きむれの最とも光れる星なる小樽高等商業學校教授大
西猪之介君流星の如く遽かに久遠の世界に去つて復た還へるなし。 Welch reicher Himmel Stern
an Stern! 打ち仰ぐ、其の光芒ま映ゆくもさやけき一巨星、若うして不慮におもくやまれ、此の宵
永遠に星座より象ちを失ふ。悼ましいかな。

さはれ、教授の思想年若くして太だ熟し其の學問業績亦た既に認められ、容易く人に許さざる福
田徳三博士をして曾て「我が經濟學界の一鬼才」と呼ばしめ、また左右田喜一郎博士をして明かに
「日本經濟學界の鬼才」と評定せしむる。かくて、よし、教授業績を永遠に傳ふべき述作は寧ろ今後
に期待せられるべかりしものだと云へ、他日、わが經濟學界思潮史の集成せらるるあらば、この
京都に生まれ、小樽に逝ける「明治二十一年十二月二十八日——大正十一年二月八日」てふ短かけ
れども意義深き教授の地上存在の記録せられ、其の特異なる個性思想業績の長がく滅びざるべきは
寸毫の疑ひを容れぬ所である。教授夭折せられたりと雖も、斯くも既に世に認めらる、之を傳ふる
の文即ち用なきに似たりと雖も、吾れらの長き交遊は、其の「最高の刹那」の傳へられたるや、痛恨
綿々、胸中の所懐、之に表現を得しむるにあらざるよりは、此の長恨癒やすに途なきを感せしむ。
是れ、其の個性思想の變遷及び業績を回顧するの文を綴づり、其の十有餘年の學問生活を通じて最
も長き縁しある本誌に寄する所以である。

近き或ひは遠き、教授に纏はり絡む吾れらの人格的精神的交通の偲ひでの數づかつ——廣き額太き眉、わけて叡智聰明を象徵する澄みわたれる眸、強き個性、鬭爭的精神力、大いなる創造力、周匝なる計畫力、而して其の徹底的實行力、凡そ是れらの資質に觸接して得たる其の長き追懷、今まいつくに求むべき、象ちに於て再び見るべからず復た享樂し得べからずとは云へ、其の人格學問の齎らし來たる感激刺戟の源泉は、尙ほ永がく潺湲として吾れらの衷ちに流れ注ぐ。蓋し其の特異なる個性人格は消ゆるには餘まりに強くして其を憶ふごとに吾れらの衷ちに甦へり、其の數づ多き述作は其の人を追想せざらんには餘まり濃く其の自己が端的に表現せられてゐるからである。

想ふに、複雑せる其の個性のうち、際わ立つて人に迫まり來るものは、其の努力的鬭爭力の強さである。が、此の鬭爭的個性が漸く洗鍊せられて貴むべき調和の材を發展し來られたる所にこそ、教授の大いさがある。其の有ゆる述作には、正さに此の個性發展の迹が織りこまれてある。筆者は斯くて、Schlegel が曾て Lessing に就いて評せる「彼れ自らこそ、彼れの一切の學問述作よりも價值多きものだ、かれの個性のうちにこそ彼れの偉大さが横はる」の語は亦た教授の場合にも妥當すると信ずる。本文の起首、Goethe の「人たることは鬭爭者たることである」、常に努め力めて努力する人こそ救はれ得るのだ」を引き、更に舊約の古きより起こして「デョズエ Joshua の配下の如く落日を東に還へしても」勝たんとせるの傳説を藉り、更に Marx と共に詩聖 Dante の「人が何んと言はうと其は世評に任かす」を標語とし來れるは、一面、強烈なる教授の個性を讃する爲めでもあるが、また同時に後段、強調せんとする其の個性の發展階段——鬭爭、努力、而してつひに調和

——を色彩濃く表現したきが爲めでもある。Tout comprendre, c'est tout pardonner!

二

わが經濟學界の先達、既に教授に許すに斯界の鬼才を以つてす。藉すに年を以つてせられたなら恰もかの Breslau 大學時代の鬼才 Werner Sombart が今ま柏林大學の重鎮而して眞の天才もて許さるるが如く、教授亦た臚がて赫奕たる一里塚を斯學發達の道程に建立するの天才たり得たであらう。事實上、其頭腦の俊敏、智識の該博、別けて廣き外國文献の涉獵、批判力綜合力の偉大、情操の豊富、これを表現すべき雄辯宏辭而して灼爛の筆致、其の産するところ屢々論争もて報はるゝとも其の論理の透徹之を認めざらんとするも得べからざらしむるもの、まさしく獨逸現代經濟學界の彼の大材の壯年期を想望せしむるのである。

茲處に筆者が敢へて其の比倫を、近く且つ教授自ら其の「小なるもの」を以つて任する所ありし本邦經濟學界の大なる權威者に求めず、却つて其の眞相恐らく輪廓すらも定だかならぬ異邦の學者を引き來れる所以のもの、他なし、縦ひ教授の學問的創造力克く其の私淑せる權威者に追躡し得んとしたりとするとも、そが有する情熱の鎔金的なるは教授終ひに之を具有せざりしが故である。鎔鐵的情熱力は之を缺けども、饒かなる事務的才幹と几帳面なる日常生活とは、教授に於て其の顯著なるを見る。前者に就いては、昨年夏期を通じて毎日登校し、始めて其の任とせられたる一切の圖書館事務の整理を獨力遂行せりてふ逸話もて、又た後者に就いては、かの Königsberg の大哲人

が多年去る日來る日一刻もたがへず散策を試めるがごと、其の散歩すがたの年を通じて時計の針の如く一定時限必ず市中に散見せられざることあらざりしと云ふ所作もて、傳へ得るであらう。かく記し來れるは、他なし、教授が、概ね共存せしめ難き二つの魂ひ、譬へば Faust の胸に相ひ搏てるが如き凡そ全く方向を異にするの二志向——天才的創造力と几帳面なる事務家的材幹と——を兼ね有せる特異の個性の所有者たるを示さん爲めである。而して斯くの如きが、天資に加ふるに斷えざる努力、克己の結果たるは、云ふまでもない。

翻つて更に古きを想ふ、この神戸及び一橋時代の俊秀は夙に學究たるべく自ら深く決せられたのであるが、それが暫らくならずして斯界鬼才たるべきの階段は、何等の故障なく其の昇るにまかされた。即ち業を卒へんとするや早くも、關一博士推挽の下に會見せられたる渡邊龍聖博士は、其の小樽への招請條件としての最近機會に於ける歐洲留學——當時にありては可なりに難き——を諾し、縁が丘に於ける授講纔かに一年有半にして其の熱求せる西歐學問の府に赴き得て實に滯歐四年半、具さに研鑽を積み得たのである。而かも傳へき、其の滯獨英期間に於ける教授個性の表現は、只管らに外遊前期の夫れに類して闘争而して努力と云ふに盡きたりと、然るに滯歐末期其の佛蘭西を経て伊太利に遊ばるるや、新たなる而してより美はしき個性の、漸く教授の胸に醸生し來れるを示す即ち此の間だ、斷えざる闘志と努力とを花床として調和的資質が育成せられたるもの之である。歸朝後の個性は斷じて其の外遊前期の夫れならざるを示せるもの、之である。既に斯くの如きあり、斯かる例言の、縦ひ偉大なる經濟學の祖而して古今を絶する哲人的詩聖の尊貴を冒瀆すとの謗りあら

うとも、教授の外遊をもて、かの自然的調和の理則に關する思索を深かめ來れる Adam Smith の佛蘭西紀行、而して其處に宇宙自然の調和を體檢して其の人生觀を革命し來れる Goethe の伊太利亞への旅に聯想せしめん、と意欲するを制し得ないのである。

遮莫、本文期する所は素と教授個性の分析解剖にはあらずして、ただ其の特異なる係を傳ふるにある。仍つて今も、其の世界觀の革新が伊太利亞の旅を畫して成されたりと傳へらるの縁しを想ひつゝ、姑らく大 Goethe の藝術的表現の若干斷片を藉り來つて、教授個性に於ける叙上發展の軌跡としての學問的立命觀—努力觀—調和觀を偲ばんとする。

即ち筆者は、其の一の爲めには

Wer Wissenschaft und Kunst besitzt,

Hat auch Religion;

Wer jene beiden nicht besitzt,

Der habe Religion.

を、其の二の爲めには美はしき天使と共に

Gerettet ist das edle Glied

Der Geisterwelt vom Bösen;

Wer i n m e r s t r e b e n d sich bemüht,

Den können wir erlösen.

を、而して其の三の爲めには萬有調和の壯美が調和的個性を育ぐくめるを想ひて

Wie alles sich zum Ganzen webt!

Eins in dem andern wirkt und lebt!

.....

Vom Himmel durch die Erde dringen,

Harmonisch all das A I I durchklingen!

の句を高揚するのである。而して年若くして既に斯かる個性の發展を遂ぐ、即ち教授必ずしも敢へて、希臘古哲と共に、また「Wagner」と共に

Ach Gott! die Kunst ist lang,

Und kurz ist unser Leben

の嘆を、文字通りには繰りかへるなりになるべきを想ふ。蓋し其の思想の記録正るに滅びざるべきものがあるから。されば茲處に筆は一轉して其の述作の回顧に移されねばならぬ。

三

想ふに、その眞の雄篇、その眞實自己表現にして畏敬する先覺にも示し得らるべき業績、喩ふれば其の先輩 Hume をすら狂喜せしむる「I am much pleased with your performance; and the persual of it has taken me from a state of great anxiety. It was a work of so much expectation. by yourself, by your friends, and by the public, that I trembled for its appearance, but am now much

relieved. と、書を送らしめける大 Adam Smith の巨作、將た Gibbon の歴史の如き類ひの文章に至つては、實は教授の今後、正當にも、約束せられたる所であつたであらう。然し乍ら既に發表せられたる述作に就いても尙ほ、名篇佳什寧ろ驚くべく豊富である。

顧りみれば、教授の著作は、「帝國主義論」(明治四十三年九月)に始まる。津村秀松博士編纂する所の國民經濟叢書第一冊として公刊せられたる同書は、歐米列強の帝國主義的思想の勃興並びに其の實際政策を記述論評し、以て我が國策樹立に資せんとせるものであつて、多讀博識の迹、殆んど pedantic と評せらるべきまでに全卷にあふれ、當年、殊に其が神戸高商卒業前後に完成せられたるの事實に依つても一段の感興を唆られつゝ、吾れら同學を驚倒せしめたものである。が、そは後年教授經濟政策觀が寧ろ保護貿易的に傾向せるものと對照せらるゝに於て其の思想の跡付けに一脈の意味を有する外、其の後の著作とは係はりなきものであり、畢竟、教授學窓時代に積みなされた一の *Ensammlung* たるにすぎぬ。之に比較すれば、寧ろ恐らく一橋關博士研究室時代に脱稿せられたもので、而して未發表のまゝに放置せられたる一未定稿「社會主義論」の方が其の思想發展を辿る上に於ては、一層有意義なりと思はるゝ。蓋し數年後に發表せられたる其の力作中に瞥見せらるゝ所の唯物史觀に對する恐ろしく懷疑的な其の論態と照はし合せたならば、と思惟せらるゝから。

外遊前期の小樽時代に於ては、纔かに當時船載せられたる Sombart の新著 *Die Juden und das Wirtschaftsleben*, Leipzig 1911. を抄譯して本紙に寄せたる外、寧ろ沈黙。而かも是れ、山雨來ら

んとして風樓に滿つるの時なりしは、後とにてぞ思ひ合はされたれ、即ち其の渡歐直前、思索彫刻せられたる一雄篇『囚はれたる經濟學』、關津村兩博士の紹介もて大正二年二月乃至四月に亘たる本誌の上に慧星の如く閃きたればである。而して此の一篇こそ、教授後年の力作の前篇として收められたものであつて、著者にとつては最も懐かしき所産たるに相異ない。否な、同文に於て夙に展開せられたる經濟學諸派の弱點に對する忌憚なき批評―故に之を別稱して消極的研究といふ―は、其の後日據るべき同學研究法上の立場を略暗示せるものであつて、篇末『放たれたる經濟學』の一篇に筆者が再び讀者に見ゆるは三年の後なるべし』と言ひ遣せる其の約束の實行せられたものが、外ならぬ、滯歐數年の一產物『生と學との距離』―前篇と照對して自ら之を積極的研究と云ふ―なのである。之に表はれたる思想の研究は、されば、綜括して後ちに期せらるべきものであるが、當年斯かる方向に向つての研究は縦ひ西歐にありては中本邦學者中亦た既に一先鞭をつけ其の成果既に歴然たるを示しをれりとは云へ、本邦に於ては、かゝる方法論任務論將た認識論的述作未だ太だ振はざりしものあり、そが大方の珍とせられたるは素と偶然ではない。

四

其の就職の唯一條件として、最近に於ける西歐留學をあせり提げたるほど、その爾かく熱求し、夢寐忘るゝ能はざる西歐數年の遊學の途に發せるは、まさに大正二年一月のころなりしか。而かも其の憧れたる北獨及び西南獨逸學都における文化の研究鑑賞僅かに一年有半にして西歐帝國主義的

角逐の一犠牲とはなつて教授亦た英國には落ち行けるなり。かの青天の霹靂に撃たれて草忙海を西に越ゆるのとき、其の頭上に閃ける聯想の一つが戰禍にはあらぬ筆禍によつて其の昔し同じ運命を荷なり祖國より倫敦へ落ちのびたる Marx の夫れなりしや否や、吾れ之を知らず。さはれ、かの巨作『資本論』が此の欲せざる倫敦放浪の裡に大成せられたるが如く、教授の不慮に早やめられたる英國行き、次いで佛蘭西伊太利亞の旅びこそ、縦ひ一層長き獨逸掩留によつて得られたるべかりし一段強き「論理の峻嚴」を逸したであらうとも、代ふるに一層の情操一層の常識を攝取せしめ、兼ねて教授の寧ろ峻烈に過ぎたる鬭争觀を和らげたるものだ、と筆者は思ふのである。而かも教授其の後の諸述作に於ける論理的徹底味を惜しむの人々は或ひは恐らく之と反對の見解をとらるゝであらうか。

そは何づれなりとするも、之よりさき、教授は、Heinrich Dietzel の代りに Edwin Cannan, Ch. Gide, Maffeo Pantaleoni から、また Georg Simmel, Heinrich Rickert のかほりに Beneditto Croce から數へられ、更に又た會々對歐せられたる我が先覺について言はゞ、左右田博士にわかれて上田博士に久濶を叙せるのである。教授常に好んで屢々口にせられたる謂ゆる「師匠」の斯かる交替には思潮發展上相當なる効果ありしは明かであらう。そは姑らく措き、爾後、攻學の餘暇、倫敦に「タイムズ」を讀み、更に英蘭西南部海邊の田舎に評論雜誌を繙きつゝ、時に話題の纏まれるものあれば即ち之を本誌に寄するもの二三。この裡ち一評論家としての素質を發揮せられたるものは即ち是れあらん、而かも概ね *pièces d'occasion* の類ひであつて教授自らを表現せるものではない。

五

而して教授個性學問の發展に最も貢獻したりしなるべき西歐數年に於ける内部生活を偲び、其の思想傾向を釋つぬるに堪ふるの表現としては、吾れらは其の歸朝後暫らくならずして公けにせられたる——其の梗概は其の序文の示すが如く南歐掩留のあひだに起草せられたにしても——『伊太利亞の旅』(大正八年十月)に、先づ赴かねばならぬ。

此の書、曩きに左右田博士の評言を得たり、云ふ、「美の國、憧れの國、伊太利を通じて歐洲文明に對する一の透徹せる批評を試みん」とせるもの。また云ふ、「著者大西君恐らく本書を以て到底單に歐洲留學の一記念物とするに止めて、終には此の書に開展せられたる思想の裡に永久に安住の愉快を貪ること能はざらん。一個の文明を評するに當つて、主として智的解釋にのみ待つものは畢竟總てを許す寛容は是あらん、而かも一を採つて他を顧みざるの熱は湧かず。此の熱なく此の力なきは批評の透徹に遺憾なきを得ざる點なるべし。文明批評は科學にあらず。……著者は才人、惜むらくは力なし。」と。(本誌、大正九年四月號。但し施せる圈點は本筆者)眞に寸鐵的評言、當時、之を讀める教授、會心の莞爾を漂はせる、筆者の今ま尙ほ記する所ではあるが、此の著者と評者とは、實は兩峯の頂きにわかれ立てるものなるは争ひ得ない。即ち著者が *Tout comprendre, c'est tout perdre* の標語かざして只管ら西歐文化に對する透徹せる理解に達せんとし従つて黑白併せ攝取する所あらんとせるに對して、評者は熱なき第三者的説明者流の近づき方もては眞個底に徹するの文

明批評を期すべからずとせらるるものだから。總するに、著者は一の聰明なる dilettante なるに對して、評者は力の人、熱情の人、論理の人、別けて高度の *puisse* なりと傳へらる。されば、博士の此の好意充つる暗示を受けたりとするも、此の領域の關する限りに於ては教授は、尙ほ永く此の考へ方に安住し得たであらう。

而かも本書には、文明批評の外、尙ほ他の一面がある。即ち「伊太利亞に對する燃ゆるが如き憧憬」之である。然り、智は愛を生ず。Leonardo da Vinci. 而して之が逆も眞だ。此の燃えのぼる憧憬、愛こそは又た個性思想の聰明さに強く響いたに相異ない。讀者幸ひに暫らく是れに逍遙するを容さるであらうか。

清楚而して婉麗に書き流されたる小冊子『伊太利亞の旅』を案上に眺むる筆者は、縦ひ倫序を失ふの誹りあらうとも、復た姑らく其れを Goethe の Italienische Reise に配して、若干の意味を語りたく思ふ。かく意欲するは、著者伊太利旅行の動機が、其の師、Simmel が「レモンの花咲く國は人年若うして訪ふべき國である」と、或る日、Goethe の思想的革命が其の伊太利の旅を劃して行はれたと云ふ研究生の一報告の後とで批評せられたのに發し、「……其日から私は心ゆくばかり伊太利亞を旅せずしては日本に歸るまじと心に堅く決したんでした」との自ら記す其の機縁を重視するが爲めではなく、實に此の大詩聖の『伊太利の旅』一卷が Goethe 其の人の人世觀藝術觀に偉大なる革命を齎らせる意味深き旅びの表徴たるがやうに、此の『伊太利亞の旅』一篇亦た教授の個性乃至世界觀に可なりに深き本質的な創造的進化を持ち來せる好個の紀念物だとする、或る客觀的

價值が認めらるるからである。

げに H. C. Andersen の誌すが如く「暗い樅の森から明るい青松の林への憧憬」——空低く垂るる北歐から蒼い空碧い海原に陽光てり映ゆる南歐半島への憧憬こそ、文藝復興後期このかた、遍ねく獨逸民族の遊志を唆れるものであらうけれども、かの詩哲の場合は此の志し殊に根深い。遙かに想ふ、Goethe の Weimar より招請もだがたくして一と度、南下の望みを捨つるも「永遠の都」に薰ずる古文化憧憬の情火、十年にして終ひに消えず、つひに久遠の戀人伊太利に往いて具さに古藝術、新生而して調和饒かなる美はしき自然及び人環を味はひ、一と夜、平和の使ひなる陽に輝くあまたの鳩携へて船路に浮ぶよと夢みて祖國に歸る。その滯伊の日縦ひ短かりしとも、Goethe の胸中、之より平和と調和と人類の愛とに満ち、復た往年 Sturm und Drang 時代の一方的なる性情、焦燥而して嵐と喘えなく、そこに Urfaust は Faust となつて偉大なる哲學渾成せられ、熱狂的なる Die Leiden des jungen Werthers の傍び全く影を潜めて最も倫理的なる Wilhelm Meisters Wanderjahre の巨作となれることを。翻つて思ふ、戦ひの爲め豫定の計畫幾くたびかみださるるにいらちつつも留學末期漸く機を捉らへ、「遅るれば遅くるるほど、懷しさのいやませる。」其の國を、Alpen の山懷る南に超えて訪ひ得たる吾が教授、果してそこに何物をか得たる。其の萬有、凡そ古文化、自然及び人事の調和和平を示し來らざるなき其の溫き心の南歐にいだかれつる其の數月の旅び路は、そも何ものをか與へたる。其の個性思想をして凡そ、闘搏より調和へ、破壊より建設へ、自力より他力へ、個人我主義より社會我主義へ、わけて思ひ昂れる坊ちやん型より聰明なる物判る

型へと變革せしめ、外遊前、後期における其の人に全く別人の觀あらしむるに至れる、此の旅びの献替せる所頗る大なるを覺えしめるのである。文化的闘争の壯志の熾んなるは素より舊に淪らざるも、曾つて *freudlos* の人、近く人事的調和の材とすらなつて人と共に、例へば「自由なる人々と共に自由の大地の上に立つて、*Auf freiem Grund mit freiem Volke steht Faust*、善處する人たるに至れるのが、南歐自然の下に革新せられたる教授だ、と筆者は解するのである。

斯かる素直はなる物の觀方と饒かなる情操の表現とは、同書隨處に見出さるところではあるが其の非利已的情操の頂點を示すものとして、「南歐の思ひ出」二節を抽きだすことを得る。多情多恨の人、情熱の國に入つて優はしき而かも倫理的なる情操一片を創造す、激情溢るれども岐路に踏みいらす、其の間だ、つぶさに人間味の深き濡ひを示せるものが此の一篇である。果然、其の非利已的情操の手綱は、一面、其の愛をして惜みなく奪ふ所あらしめつつ、他の一面に於ては他を自らの犠牲たらしめずして終はる。例へば *Charlotte* に對する *Werther* の如くならずして、却つて *Margarete* に對する *Faust* の如く、「抽象して伊太利亞と呼はるるものを具体化すると貴女になります」底の熱情に浸りつつ尙ほ淨き「永遠に女性なるもの」*Das Ewig-Weibliche* として、愛他の情操を高潮せしむる。思ふに *Werther*, *Tasso*, *Faust* はた *Wilhelm Meister* すらも *Goethe* 自らの表現にはあらずして詩的創造なるが如く、此の「南歐の思ひ出」一篇の主人公或ひは教授の藝術的創造に過ぎざるべしとは雖も、斯かる倫理的情操を創作し得たる教授の個性發展に至つては、仰ひで以つて殊記するに足るものなくてはならぬ。

かかる如きを、筆者は、其の南歐に得たる貴き情操の究極的表現として悦ぶものではあるが、此の『伊太利亞の旅』は固より、有島武郎氏の近かく施せる『神曲』の解釋の如く、「ダンテはその愛の獲得の飽満さを自分一人では抱へきれずに『新生』として『聖曲』として心外に吐きだした。」を其の一篇に描かれたる如きの愛の飽満を讀者に傳ふるべく綴られたものでは、勿論ない。其の一流の文明批判の部分は敢へて問はず、試みに「パンタレオ訪問記」を繙き、また「クローチエ」の一節を繙し、而して翻つて Pantaleoni の名著英譯 Pure Economics 及び Crocé の代表作同 Historical Materialism 乃至 Philosophy of the Practical, Economic and Ethic (殊に其の第二編第四、五節)を一讀し、更に教授専門上の力作に示されたる、かの覆へすべからざる自然科學派經濟學に對する信仰及び現代經濟學の認識論的改造に對する態度を察せられよ。然らば即ち、此の一小冊子は實に文明批評、憧憬情操の表現以外、更に其の専門述作に於ける立場の由來すらも内部生活的に表呈せられざるを見出さるるであらう。何づれより見るも、意味深長なる一述作たるを失はぬのである。

六

回顧の筆は、茲處に、教授の magnum opus に移る。五年の長き、約束せられたる其の經濟學認識論上の雄篇は、『生と學との距離』てふ題名の下に——之を導き來れる先行、論說の副題名は惜く——大正七年三月乃至翌年二月に至たり本誌上に發表せられたのであるが、後ち既述せる『囚はれたる經濟學』の一論說を前篇とし、更に積極的研究と銘打てる本論說を後篇として、恐らく著者

にとつて最も懐かしまるる一語『囚はれたる經濟學』てふ表題もて、大正九年一月、刊行せられたのである。

記して此處に至り、端しなく憶ひ起さしめらるるものに、筆者の里昂及びツューリヒの生活がある。祖國より毎月、本誌の寄贈をうくる毎に凡そきまつて、あるは Rhône 河畔を縫ひ走る清楚にして且つ重厚なる「プラタヌ」の竝木道を、あるは Zürcher 畔「リンデン」の花あまく香る下た道を散策しつつ吸はるるが如く讀み耽るを例とせるものこそ、この矢繼ぎ早やに發表せられた論策なのである。——凡そ其の何處に往く？を豫想せられつつも、名工の築ける一大迷宮を心地よくひきづらるる如きの思ひに曳かれつつ。かくて惟へらく、同論說必ずや多數讀者の感興を唆示しつつあるなるべしと。果然、暫らくして、著者の最も尊敬せる斯界權威の一人、左右田博士の偶目する所となつて、「凡手到底及ぶべからず、絢爛華麗誠に一代の才人」と評せらる。たゞ論理的透徹而して創造的進化もて學問の生命なりと觀する博士の評言は、然し、斯く讀まれた、「才人大西君伊太利亞の文明を味はんには智あまりに敏く、獨乙の論理を解せんには情操あまりに繁し、『囚はれたる經濟學』一篇卷頭より卷尾に至るまで、其題名よりして既にあまりに『伊太利亞の旅』的なるに過ぐ。

一は心を以てすべきに頭腦を以てせんとし、他は頭腦を以てすべきに心を以てせんとす。恐らくは是れ、著者が何等の結論に到達するを得ざりし所以なるべし」と。(本誌、大正九年四月號、但し圈點は筆者)然り、苟くも科學研究殊に斯かる經濟學方法論乃至認識論の研究に従ふもの、凡そ一定の結論を提示し來るの義務あるは明かである。教授前著には認めざるや dilettantisme が、

この田地に於ては認められぬは言を俟たぬ。然るに其の結末に至りて著者自ら明かに「……左顧右眄、極めて徹底せざる窮境を曝露するのみで……」と謂嘆して筆擱ける如く、その確たる結論を掴み得ざりしは事實である。

思ふに右の評者、博士の如く其の *puriste* の論態を強き人格鋭き論理もて學問的に貫ぬき得て、謂ゆる、「第三なるものは世に在らず!」 *Ein Drittes ist nicht da!* を高唱し得るは素より學問研究の窮極限たるは論なけれども、然し乍ら、何らかの結論に到達すべく努め最めて努力する惱める論理の過程の裡にも小ならざる意義の發見せらるべきことも亦た明かであらう。況んや、本書の如く、「其放たれざる經濟學の苦惱とは、我を幽閉の暗より救ひ出すべき一人の騎士だになき醜婦の苦惱にあらずして、實は我縁は既に深く自然科學と結ばれたるに拘らず、新に文化科學と呼ぶ *Weather* の現はれて、無下には卻け難き熱き思を囁き寄る、*Lotte* の心情たるを看取せられん事」を、既に、切望せるに於て、換言すれば、古往今來現はれては消ゆる夥だしき諸學派を煮つめて其處に自然科學派經濟學と文化科學派經濟學との對立的二元にまで單化し來たり大凡其の歸趨を暗示せるまでに其の思想を展開し來れるに於て、本書は、已に多大の學問的貢獻をなせるものだ。今ま、其一切の *technicality* を省いて唯だ中心的思想と思惟せらるるものを傳へ、而して斯かる思潮に立てる教授今後の研究方向及び内容の如何なるべかりしかを尋ねんと欲する。

うち見る、命題、『囚はれたる經濟學』また『生と學との距離』!吾れらの畏友、飯島幡司教授曾て筆者に與へたる私信に於て、十數年前、歸朝早々の島村抱月氏に亦た『囚はれたる文藝』の題目も

てる一消極的文藝評論ありしを回顧せられたるあり、又た教授の最も尊敬せる H. Rickert の著述讀める人々は恐らく「生と學とを距つる深き淵」die Kluft zwischen Leben und Wissenschaft の如き言ひ表はし方を見いださるゝであらうけれども、先づ其の命題の警拔なる而して着想の非凡なるや、此の鬼才ならでは、を想はしむる。而かも之に内容盛るに、西歐經濟學思想變遷の動因、及び存續理由を驚くべき文献的考證の該博さもて廣汎なる文化史的立場より論評し、かねて經濟學識認論を題材としての其の哲學的思潮の發達を展開せるものを以てし、之を表現するに、宛がらに四條派の繪卷のごとき明澄清婉の彩筆而して理路整然一絲亂れざるの論理もてする。邦文もてせられたる純理經濟學序論の珍となすに、大方亦異存がないであらう。先づ卷を通じて概觀すれば、其の第一乃至七章は、その前篇なる消極的研究を其のまゝ色彩強く描き續けて古典學派及び歴史學派の缺陷を指摘しつつも、尙ほ夫の『伊太利亞の旅』を打ち貫ける、謂ゆる總てを解するに依つて總てを許すの精神もて、「一の學派の斃れたる跡を受けて、何故他の學派の生する必要生ぜしか、分けて這般經濟學界の變遷は哲學思潮の發展と如何に照應しつゝあるか」の問題を詳論し、引きつづける三章殊に第九、十章に至つて其の自らの所懷に經濟學的世界觀を立てられたものだ、と思惟せられる。

斯くて吾が筆はおのづから同書後三分の一の論評に移され、斯くて「生に即せむとする學」及び「生の爲の學」を主な對象たらしむるのである。著者、夙に『生と學との距離』篇の序論に於て、同書にあつては最も重大なる「或角度より眺むる時に、古典學派及び歴史學派の經濟學は、決して水

火相容れざる傾向にあらずして寧ろ内に脈絡呼應せる統一的努力と見得る」てふ一命題を高揚した思ふ、斯學のみならず何れの學問の諸流派の關係亦た然るべきが故に、一見、當然過ぐるほどに當然なる此の命題に對し、此の鬼才果して如何なる近づき方を試みんとはするやと。かの藝術的巨匠のみ克く有する如きの魅惑的筆路もて讀者の思惟を漸く強く其の視へる方向に牽引し來れる著者は茲處に至つて、宛がらに Mephistophales の放言するがごとく、其或角度とは取りも直さず生と學との距離なる事だと言ひ放なつ、而して「諸學派相互の相違は此生に對して探る距離の遠近にあり、諸學派破産の原因も亦、個別的内容的には相異なれども、總て此生に對する距離の妥當を失したるに發す」と論定する。更に詳しく説いて云ふ、「或る特定の生を立脚點と定め、之を律せんとして組織されたる經濟學は、其生との關係甚だ密接にして距離短少なる結果、此生に對しては適切な羅針盤たり得れども、此生變じて他の生となると共に、從來保有したる權威は之を失はざるを得ない。之に反して、あらゆる生に向つて自家の權威を建立せんと欲する學は、自ら個々具體の生を捨てて生の普遍性に着目するが故に、永く學としての勢力を維持し得るものの、個々の生に對する距離は極めて延長せられ抽象に失するの嫌あるを免れ難い。」と。

著者の視へる標的茲に至つて略ぼ明かになる。そこで吾れらは進みて著者の學的傾向を見極はむべく、この二學派の何づれにこそ、一層の共鳴を感じられたるぞ、をたづねばならぬ。即ち追懷は序論及び第五章「歴史學派」に溯り入るのであるが、教授が篇頭眞つ先きに Anatole France の妙みじき物語りを緩やかに語り傳へたとき、既に、新史歴史學派の巨頭 Schmoller の巨作、げに其の標語

にや Goethe の

Wer nicht von dreitausend Jahren

Sich weiss Rechenschaft zu geben,

Bleibt im Dunkeln unerfahren,

Mag von Tag zu Tage Leben.

を高揚し來れる、尢然たる大版一千四百頁、Grundriss der Allgemeinen Volkswirtschaftslehre. の巨作に、言ひおくる皮肉が感ぜられる。次いで、ほど經るや、面をかなぐりすてて、「立體的なる研究が平面的なる研究に優るとの説明は全く存在せざるが故に、現象を主として古典學派の設けたる平面的法則にして排すべくんば、時代を主として歴史學派の立體的に造りたる史的發展の法則とても亦等しく排斥せられねばならぬ」と、敦園を來つて、代るに Carl Menger, Pantaleoni, Ch. Gide, H. Dietzel を昂學する——更に恐らく Edwin Cannan, J. B. Clark をも——所、著者が寧ろ深く新古典學派に傾向せられたことは、明白である。然し乍ら筆者密かに思ふに總じて、机上の推理に囚はれたる經濟學上の浪漫主義—古典學派—も、箇々事實の詮穿に遙せられたる自然主義—歴史學派—も、共に生の河畔に佇んで傍觀するものであつて、生と共に浮沈し其の流れに泳ぐものにはあらず、従つて更に考ふれば Mephistophales が

Grau, teurer Freund, ist alle Theorie

Und grün des Lebens goldner Baum.

と喝破しける如く、生と學との溝渠は絶對的に滅絶せらるべきにあらざるは勿論であつて、斯くの如きは吾が鬼才を俟つて始めて知るべきではない。然かし、此の好題目を提唱し、經濟學界思潮の發達變遷を文化史的に縦論し來れる文字には、縦ひ其れが一方的ならずとも、否な「二方的」*einseitig*ならざるあつて、確かに滅びざる價值を體得するのだとも言ひ得らるる。

行論、茲處に至つて教授は即ち自己を表現し來らねばならぬ。而して其の前哨は既に、第六章、歷史學派から「文化科學派へ」に立てられたのであるが、實に教授自らを救ふべく高く掲げ來れる、法燈、之を文化價值 *Kulturwert* 一詳しく云へば *ökonomischer Kulturwert* の觀念となすのである。

之より先き、教授の先行論說『囚はれたる經濟學』結尾に顯はれたる而して解かれずに遺されたる思想を追躡し、後ち其の獨逸に入るや、*Windelband* を承けて之を大成せんとする *Heinrich Rickert* の歷史哲學の概念の早くも *Max Weber* 其の他の經濟學界の幾先達によつて、經濟學方法論任務論の概念構成中に攝取せられ、更に一層直接的には教授久しく宗とせられたる、我が左右田博士亦た *Tübingen* に據つて、*Geld und Wert*, 1909. 及び *Die logische Natur der Wirtschaftsgesetze*, 1911. を公けにし斯界の先輩及び其の同僚 *Stephinger* 等を對手として華々しく經濟學認識論上の論争に従へるを眼のあたり目撃せられしを、彼れ是れ思ひ合はするとき、教授が此の法燈高く掲げ來れるは、其の決して偶然ならざるを見るのである。

然かし乍ら此の力作に於て尙ほ未だ何をか文化價值と云ふ内容を詳しくは示し來らざりし遺憾は、同書の性質上姑らく措くとして、本書に示されたる教授は一面、經濟學の立脚地を夫の *Rickett*

の、自然科学及び生的文化科學を左右に配しての中間範圍的學とするの立場に満足する能はずして努力すると共に、他の一面、Rickert よりも前進し左傾せる而して純粹に史的文化科學的方法を高唱する左右田博士の態度にも同する能はずして思ひ悩めるのである。茲處にこそ、前掲評者の「論理の峻嚴なくして……」が生きて来る。然しながら是れ、「頭腦を以てすべきに心を以てせん」とせるが爲めのみでなく、其の前者に出で得ざりしは、謂ゆる「實は我縁は、既に深く自然科学と結ばれたる」を信せるに因り、而して後者に從ひ得ざるは、若し然かすれば、「經濟學は從來世襲せる財産の殆んど全部を失ふ」の危険なる結果に立ち至るべきを恐れたのに因るものではなからうか。而して更に穿てば、其の心の隅みには曾て伊太利亞で戒められたであらう所の、Croce の “..... Spar e yourselves the trouble of philosophizing of economics. Calculate, and do not think!” の響きが消えも得せであつたのではなからうか。而して結論は更に溯つて曾て自ら宣ぶる所の、「之を要するに問題ば、C. Menger か Rickert か、自然科学派經濟學か文化科學派經濟學かと云ふに存せずして Menger と Rickert と、即ち自然科学派經濟學と文化科學派經濟學と、として提出すべきである」と云ふに定められたのである。

七

斯くして教授、經濟學研究方法論上の立場は明かに宣べられた。併し乍ら今後、通過せざるべからざる所、從つて其の悶ふる所は即ちあり、Purisme の命ずる Ein Drittes ist nicht da! の標語、是

れである。されば教授今後の研究、或ひは此の二思潮の何づれへかに一層傾向することも。穴勝ち考へられぬ事ではない。併し斯かる推論は今ま全く徒勞の業ではある。かくて明徴せられた其の儘まの斯學認識論上の立場は上來、既に明白であつて、Psychologismus 並びに Apriorismus の包攝！ Naturgesetze 並びに historische Gesetze 乃至 Wirtschaftsgesetze の攝取！、而して此の若干、妥協的なる従つて調和的なる立場に立つての經濟學其の者即ち内容の盛り込み、其の體系の整然たる集成こそ、教授成就し來るべき約束せられたる事業の一つたりしのである。

事實上、かの驚くべき精進努力而してかの異常なる批判綜合力もてすれば恐らく不可能にはあらざるや、Menger と Rickett かと問ふべきにあらずして、Menger と而して Rickett とを論すべきである。てふ其の宏大なる主張を、經濟學方法論から更に進みて、經濟學内容構成の上へ持ち來たし實現せんとせる努力が、『囚はれたる經濟學』公刊後只管らに彫刻を打ち加へられたる其の經濟原論の稿本其の者に外ならぬ。姑らく、舊きを回顧すれば、例へば福田博士小稿の一斷片、尤も、改定經濟學講義を以てするも學士（左右田博士を指す、——筆者）の立場より見れば、予が説は現時通行の Psychologismus に囚はること猶ほ學士の説の Logismus（假りに造語す）に於けるが如くなる可きは勿論にして、學士と予と幾葛藤を打出するも到底同一の立場に會す可き見込あるものにあらずるは明なり。（圈點は筆者）の如きを標的とし、この二主義の果して Rhone と Soane との如く潺緩として合流するの見込なきか、を思索しつゝ精進せられたものが、實に其の原論の稿本であつたのである。

貴重なる教授研究の痕を藏する遺稿たるべきものは、獨り此の原論のみに止どまらず、經濟史——尤も、この學田にあつては教授は寧ろ當然にも Rickett の史學觀をはなれ、却つて例へばかの Moderne Geschichtswissenschaft. に展開された如きの Karl Lamprecht の史學的觀方を宗とせられたやうである——及び教授個性傾向から之に可なりの興味を注がれた商業政策の稿本にまで及ぶ。而して吾れら友人としてのみならず我が學問の爲め、是れらの稿本が其のまゝ埋没するに委ね去るゝことは、衷心愛惜する所である。が、素と、遺稿整理の業たる、かの美はしき Marx に對する Engels の關係の如き、思想上の協働者兼ねて而して従つて業績上の遺產管理者たるものゝ存するにあらざるよりは、難中の難事たるを免れぬ。是れ、欲して而かも輕々には期せざる所以である。けれども、其の遺著として直ちに且つ容易に成就せらるべきもの、少くとも一つは存する、即ちかの力作公刊後の教授専門的學圃の休耕期間に執筆せられ、本誌並びに諸評論雜誌に掲げられたる數小論文——「人口と國力」、「經濟學と倫理學」、「古き文化と新しき文明」、「社會政策の歸趨」、「鬭爭の心理」等の諸問題に關說せられたるもの——の一單行書としての公刊、之に外ならない。凡そ是れらは、或ひは權威ある學會に、はた雜誌に發表せられ、更に其の公表後、其の整理癖もて推敲朱筆を加へられたるものである許りでなく、謂ゆる象牙の塔より立ちいでて街頭に宣ぶるを寧ろ快とせられたる其の平常の尙好より判するも恐らく會心の所産たりしなるべしと思惟さるゝものが多いのであるから、今更めて之を一論文集化するも其の志に戻るものでは萬々、在り得ないと思ふ。

あゝ、是れらの諸述作相ひ俟つて、吾れら庶幾くば、Goethe の Faust が

Es kann die Spur von meinen Erdetagen

Nicht in Aeonen untergehn.

と高唱して「行」の上に安住せるが如く、教授の業績的足跡を長く地上に遺さしめたい。回顧しては又た教授が Rickert に倣つて、それを好まれたる Richi の美しき詩的表現——Die Werte aber, , werden entdeckt und gleich wie die Sterne am Himmel treten sie nach und nach mit dem Fortschritte der Kultur in den Gesichtskreis des Menschen. Es sind nicht alte Werte, nicht neue Werte, es sind die Werte——中の嚴たる觀念「唯だ價值たる價值, die Werte の存在を認め、絶えず之を學究的精神歩行の光れる導星として、この認識に、この理想に日一日と近づくべく努め力めて努力せられたる、教授の業績を永く偲びたい。

(悼む甚しき武田教授坂西教授の故人に關はる第一信に接した二月中旬起稿、三月十日稿了)